

〈資料紹介〉「壬生地蔵縁起絵巻」注釈（一）

八 木 智 生

「壬生地蔵縁起絵巻」は、壬生寺（京都市中京区、律宗、本尊は延命地藏尊）に所蔵されている。本文はすでに、元興寺仏教民俗資料研究所編『壬生寺民俗資料緊急調査報告書 第三分冊』（壬生寺、一九七五年）に翻刻されているが、数か所の誤りが認められる。そこで、あらためて原本を参照して翻刻と注釈を行うことにした。

本稿では、第一巻第一話と第一巻第二話を対象とする。

【解題】

「壬生地蔵縁起絵巻」は、全六巻・十八話から成る卷子本である。各巻の詳細な寸法などは、泉万里「壬生地蔵縁起絵巻とその周辺」^①に記されているため、ここでは省略する。絵巻には複数の錯簡があり（後述）、紙継ぎや料紙の長さは一定ではない。また、各巻冒頭に収録説話の表題をまとめて記し、後筆でその説話が起った年号

が添えられている。

壬生寺の縁起は、現在三種類が確認されている。まずはこの六巻の絵巻、次に元禄十五年（一七〇二）の序がある版本（大本、上中下三巻三冊）、寛政二年の序がある版本（半紙本、乾坤二巻二冊）である。略縁起も複数存在する。

元禄の版本は、「壬生地蔵縁起絵巻」を基としたことが序に明らかである。構成としては、説話を一部改変しながらもすべて収録し、さらに説話を増補している。寛政の版本は、元禄の版本と同文であり、なおかつさらに説話を追加している。「壬生地蔵縁起絵巻」^②は現存する壬生寺の縁起中最古であり、後世の版本の基礎となっているといえよう。

他に、本坊地藏院の住持栄岳（のちに普岳）による「壬生地蔵縁起絵巻」の写本である、京都大学総合博物館蔵『壬生家文書』五六

九「壬生地蔵院縁起（写）」が存在する。奥書には、「右此縁起者雖為悪筆為読習二ケ日之間書写畢 于時寛文十一辛亥年四月念三」とある。寛文十一年（一六七一）四月二十三日、読誦のため二日間て書写したという。卷子本形式で、「壬生地蔵縁起絵巻」の第一・二・三巻を一巻、第四・五巻を一巻、第六巻を一巻としてまとめ、全三巻となっている。内容としては、書風を似せ、改行も一致させるほか、錯簡の部分には「此間切テ有」などと記す。絵は省略され、「有絵」と記入されている。これらは現存「壬生地蔵縁起絵巻」の状態とまったく一致している。また、漢字に振り仮名を添える部分がある。

さて、これまでの「壬生地蔵縁起絵巻」に関する先行研究は、ほとんどがその成立をめぐるものであったといつてよい。

まず佐藤瑛子氏は、「近世の模本であるが、絵は古土佐、詞書は蛭川親当と伝えられ、中世絵巻の特色をよく遺して」いるという。^③

伊藤正義氏は、「あまり自信はないが、これは恐らく慶長初期頃の成立とみてよいのではあるまいか。（中略）この極めは現存縁起のものではなく、文明の奥書を持った古本が明和四年には伝存しており、その本についてのものだということになる。」という。^④

若杉準治氏は、縁起の撰述を「鎌倉後期」とし、「現存する絵巻は、室町時代の転写本で、付属の明和四年（一七六七）の極書に転

記されている「文明十八年（一四八六）三月廿四日」という奥書は現存しないものの、この年紀を制作期とみてよいと思われる。」という。^⑤

ここまで紹介した各氏の論は、現存「壬生地蔵縁起絵巻」は摸本であり、原本（古本）は中世のものであるという理解でおおむね一致しているようである。ただし、いずれも明確な根拠が示されているわけではなく、印象論的になっていることは否めない。

泉万里氏は、美術史の観点から絵を分析したうえで、文明期の絵巻制作の場や壬生寺の状況から、

この絵巻は、極証文記載の文明十八年三月二十四日に大念仏の結願に合わせて地蔵に奉獻されたものと推測できる。そして、ほぼ同時期に複数の絵師によって描かれたものであり、人物表現などに文明期の作例との共通性を指摘できる。（中略）以上のようなことから、「壬生地蔵縁起絵巻」を、十五世紀後半、文明期の絵巻の一本と位置づけることができよう。

⑥ 文明期の絵巻の一本と位置づけることができよう。成立というものは一致しているが、現存「壬生地蔵縁起絵巻」がその原本か否かについては論が分かれている。

これまで、「壬生地蔵縁起絵巻」の本文を対象とし、その特徴に言及した論は管見の限りみられない。そもそも本文の翻刻はあつた

ものの、注釈はなされていないのが現状である。

前記のように、「壬生地蔵縁起絵巻」には、極証文が現存する。

伊藤氏は、極証文の本文引用部分が現存本第一巻冒頭本文と一致しないことを指摘するが、その原因を「新本が基本的には古本に基づきながらも、さらに増補再編の可能性がないわけではない」という^⑦。また泉氏は、蛭川親当の没年と極証文の「奥文明十八年三月廿四日」という記述が一致しないことを指摘し、「鑑定結果には疑問がある」としながらも、最終的には成立時期をこの日付に求めている^⑧。「壬生地蔵縁起絵巻」の成立時期にも関わる問題であり、この極証文について、あらためて検証してみたい。

極証文には、明和四年（一七六七）の奥書があり、神田道儔（年代からみて、五代神田道傳定武（一七一〇～一七七三）であろう）によるものである。全文は以下の通り。

壬生寺縁起

一本願大僧都一刀三礼事

夫釈尊之恵日西天の

奥文明十八年三月廿四日

右六卷古土佐画有之

蛭川新右衛門尉親当筆

不涉疑論者也応需不得

〈資料紹介〉「壬生地蔵縁起絵巻」注釈（二）

固辞明証之証

神田道儔^⑩

明和四年仲秋上旬

「夫釈尊之恵日西天の」は第一巻第一話冒頭の書き出しであり一^⑨致している。「奥文明十八年三月廿四日」は、絵巻の奥書を書写した記述と考えられるが、現存の「壬生地蔵縁起絵巻」には、いずれの巻にも奥書が存在しない。京都大学総合博物館蔵「壬生家文書」五六九「壬生地蔵院縁起（写）」は、前述の通り「壬生地蔵縁起絵巻」を忠実に写したものであり、これが書写された時点で「壬生地蔵縁起絵巻」はすでに現在と同じ状態であったと考えられる。つまり、寛文十一年（一六七二）四月二十三日時点では、すでに現在と同じく「壬生地蔵縁起絵巻」に奥書は存在していなかったとみなすべきである。神田道儔が奥書に相当する記述を記しているのは不審といえよう。

そこで、極証文自体について考える必要がある。まず標題について、極証文は「壬生寺縁起」とするが、絵巻の題箋は「壬生地蔵縁起絵巻」であり、一致しない。次に、冒頭の書き出しについて、前述の通り「壬生地蔵縁起絵巻」は各巻の収録説話の章題を巻冒頭にまとめて記すため、第一巻の冒頭は正確には「一本願大僧都一刀三礼事 正暦二年／＼ 当寺御堂供養事 寛弘二年／夫釈尊之恵日

西天の「〱」は改行）となるべきところ、極証文では第二話の章題が抜けている。この極証文は、現存「壬生地蔵縁起絵巻」についてのものではないと考えねばならない。

とするならば、明和四年には現存本のほかに別の本があったのであろうか。仮に別本と呼称するが、それは右の特徴を考えれば、奥書が付された六巻の絵巻ということになる。極証文を書く以上、神田道僖が見た別本は原本であつてしかるべきであろう。すると、現存本は摸本となる。しかし、寛文十一年に「壬生地蔵院縁起（写）」が「読誦」のため書写しているのは現存本であり、この時には二本とも存在しているはずであるが、あえて摸本を選ぶ理由はない。また、摸本に錯簡が生じ、再構成する理由もなからう。もとより、壬生寺に現存本以外の縁起絵巻は存在せず、そのような記録もかつてない。壬生寺以外でも同様である。現存本が摸本であるとはにわかには認めたいのである。

ここで、極証文の記述について非常に重要な点について言及しなければならぬ。絵巻の奥書を文明十八年（一四八六）とするにもかかわらず、詞書の筆者を「蜷川新右衛門尉親当」とする点である。蜷川親当は智蘊の名でも知られる連歌師で、足利義教に仕えた人物である。彼の死没は文安五年（一四四八）五月十二日であるから、文明十八年の絵巻制作に携わることは不可能である。「蜷川新右衛

門尉親当筆」が絵巻本文を写したのか、神田道僖の鑑定によるものかはわからないが、いずれにせよ極証文の記述は決定的に矛盾しており、根本的にこの極証文自体の信憑性は低いと言わざるを得ないであろう。別本存在の根拠は極証文の記述が現存本と異なるということであつたから、したがつて別本が存在した可能性は極めて低いといえる。

とはいえ、神田道僖の示した文明十八年という年代は、あながち荒唐無稽というわけではない。本文の内容や絵の作例からみて、「壬生地蔵縁起絵巻」が十五世紀後半から十六世紀前半の成立であるとしても違和感はない。『実隆公記』延徳二年（一四九〇）九月二十三日条には、「壬生地蔵縁起絵法幢金剛三昧院二巻未猶在之云々披見」とあるから、少なくともこれ以前であることは間違いない。『晴富宿祢記』によれば、文明十一年（一四七九）には勧進により築地が築かれたり（二月三十日条）、勧進曲舞が行われたり（五月十九・二十・二十三・二十六日条）している。また『実隆公記』・『尋尊大僧正記』には、文明十七年（一四八五）三月に猿樂が行われた記事がある。この時期の壬生寺は、応仁の乱からの復興であろうか、さかんに活動している様子である。これらの状況を受け、文明十八年という時期が比定されたのかもしれない。

最後に、錯簡について、「壬生地蔵縁起絵巻」において明らかに

錯簡であると思われる紙継ぎは、第一巻第一話・第一巻第二話・第二巻第一話・第四巻第一話に二か所・第五巻第二話・第六巻第五話の、計七か所である。特に第一巻第二話の錯簡は、文字が料紙の端で切れていることから、絵巻完成後に切断されたことが明らかである。なおいずれも文の途中で切れているが、錯簡前後は同じ説話である。

絵の数が少ないということも、錯簡と無関係ではあるまい。一般に、縁起絵巻は本文とそれに対応する絵が交互に配されているが、「壬生地蔵縁起絵巻」では、絵が付されていない説話が複数存在する。特に第六巻はすべての説話に絵がなく、詞書だけの巻となっている。完成当初はすべての説話に揃っていた絵が、切り離され散逸した可能性を指摘しておきたい。

とするならば、本文・絵ともに散逸した説話があつても不自然ではない。六巻という巻数は六地藏にちなんだ数字であるため変更はないと考えられるが、話数は現在とは異なる可能性がある。

【凡例】

- 一、底本には、原本を用いた。
- 二、本注釈は、本文、語注、補注からなる。
- 三、本文は、底本を翻刻し、基本的にその通り表記した。ただし、

〈資料紹介〉「壬生地蔵縁起絵巻」注釈(一)

通読の便宜のため、適宜次の操作を行った。

- ・ 任意の改行をほどこし、各段落の先頭は一字下げた。
- ・ 旧字、異体字は通行の字体に改めた。
- ・ 底本の細字、割注は「 」で示した。
- ・ 句読点、濁点を補った。
- ・ 明らかに錯簡と思われる部分には、〈錯簡〉と表記した。
- ・ 絵は〈絵〉と示した。
- ・ 貼紙は〈貼紙〉と記し、内容を枠内に示した。
- 四、語注には、本文中に「*」を付した語句について、それぞれ記述した。難解な語句や固有名詞などを解説している。
- 五、補注では、語注では解説しきれなかった、主にその段全体にかかわる問題について、さらに考察を加えている。
- 六、各話の最後に、版本「壬生寺縁起」(元禄十五年序)の該当話を記した。なお、版本の説話標題は版本巻頭の目録による。
- 七、注釈にあたって、多くの文献・論文・辞書から教示を得たが、紙幅の都合上省略した。

第一卷

一 本願大僧都*一刀三礼事 正暦二年

【本文】

夫釈尊之*恵日、*西天の雲に隠れしより以来、*春秋二千余回、*生死之暗冥々たり。*慈氏之*月輪、*東土の霧に籠りしより以来、*星霜五十六億、*苦海之浪茫々たり。過去を*千仏出世の古に願ば、*流転之蹄すでにふりたり。未来を*三会得脱の末にのぞめば、*輪回の車なをあらたなり。悲哉、*苦輪之裏、哀哉、無仏之時、誰人をたのみてか*依怙とし、何の尊を以てか*船師とせむ。*覺母の文珠、*願王の普賢も及ばず。*補処の弥勒、*大悲の観音もしかず。是則菩薩の德行は優劣なしといへども、*機感の時節なを疎略ある故也。我聞地藏菩薩、専大師釈尊の付属をうけて、二仏中間の衆生を引導す。*小機愚者之結縁を撰ぶ事なく、無仏世界の教主とあふがる。*機縁まことにふかし。濟度うたがふことなかれ。爰にいま*宣風坊のほとりにおひて一の*紺殿をたつ。その本願三井快賢僧都と申は、*粟田関白道兼公の苗裔、其門資はまた*智証大師の弟業なり。*止観伝灯の誉、自宗の甚明なる事に達すといへども、*慈堂*懸磬之憂、たゞ*洪恩の謝がたき事を歎く。これによりて*禪林に居を*卜て穢土を厭離し、*定水に心を澄て淨利

を欣求す。内には*釈尊の八万歳之遺教を伺ひ、外には*魯聖十八章の微言をこと、す。*至孝は百行之先、報恩は万善之本なり。母にあらざば何ぞ子をたのみむ。子にあらざば何ぞ母を養はむ。寤もこれを思ひ、寐もこれをおもふ。午茶煙絶、春夜永日のうつりがたき事を思ひやり、*西楡影傾夕、その余年のいくばくならざる事を歎く。仍京華に棲て常に慈顔を拝し、*水菽にこたへてかなしむに微力なし。*堅牢地神も忽に真実のこゝろざしをかぐみ、近郊隣人はじめて*唱導の仁にまねく。貴賤みな諸道徳に帰し、*緇素すでに*富樓那と称す。或は連々の囑請に応じ、或は処々の講行に接す。彼悲母の日計やうやくか、さず、其孝子の露誠たちまちにあらはる。仍仏師*定朝（法成寺金堂造仏之賞、叙法橋、又昇法眼、仏師昇*綱位初例也云々）に仰て、地藏の尊像をてうこくし奉、一刀三礼の懇精をつくして一千日の間に等身の聖容を造畢す。*蓮眼瞬がごとく、座像の尊顔を拝す。

*棘心至誠にして、つるに母子ともに彼*觀率の内院に移り、門弟僅に此一字の草堂をあがむ。無縁無怙の道場たりといへども、唯*一瞻一礼の利益をあふげり。又伽藍擁護鎮守は*日吉十禪寺を勸請したてまつらる。これ則本地垂迹、*内証外用の功德をつかさどるゆへなり。夫三世諸仏

（錯簡）

へり。爰に快賢僧都*御衣木を加持し、随分の*資貯を抛て無忒の信心を凝給ふにや。*天衆地類も影向し、菩薩聖衆も照臨し給へり。誠に是*大権薩埵の示現、凡智のはかる所にあらず。然則本尊の威光一天にみちて、利生を蒙る物、翰墨の記する所、言詞のおよぶ所にあたはず。

その本誓をいへば、毎日晨朝の三昧には膚を奈利の焰にこがし、今世後世の悲願には質を六道にわかち給へり。此菩薩、一聞一見の功德*恒沙劫に説ともとどけり。機応時いたり、感涙袖を絞れり。*簷花之匂、庭月之影、これを*仏餉灯油の供養にかへ、*緑羅之服、紅霞之滄、これを僧侶衣鉢之*資儲にたのむ。まづ*夏臈懇懃の懇祈をさ、げては*金輪聖王、天長地久、四海泰平の御願をたすけ奉る処なり。

〈絵〉

【語釈】

一 刀三礼 仏像を彫刻するときに、一刻みするごとに三度礼拝すること。

惠日 仏の広大な智慧を太陽にたとえた語。

西天の雲に隠れ 釈尊が西方の天竺で入滅したことをいう。謡曲「弱法師」に、「それ仏日西天の雲に隠れ、慈尊の出世まだ遙か」と

ある。

春秋二千余回 仏滅から二千余年たったことをいうが、釈迦入滅の年は確定していない。

生死之暗 衆生が悟ることができず、生死流転を繰り返す迷いの世界に在ること。

慈氏 弥勒菩薩。

月輪 衆生に本来備わっている心を満月にたとえた語。仏の悟り。密教における知恵の象徴。

東土の霧に籠りし 東土は西天(インド)に対して中国・日本のこと。仏教伝来の過程で仏の教えが失われた意か。あるいは、「以来星霜五十六億」という後の文から考えるに、釈迦入滅のことを指すか。

星霜五十六億 釈迦入滅から五十六億七千万年後に弥勒菩薩が出現するまでの間、現世に仏が不在となる。

苦海 衆生の苦しみが果てしなく続くことを海にたとえた語。

千仏出世の古 過去の莊嚴劫に一千仏、現在の賢劫に一千仏、未来の星宿劫に一千仏が出世するという。

流転之蹄 「流転」は六道・四生の迷いの生死を繰り返すこと。生まれ変わり死に変わって迷いの世界をさすらうこと。「蹄」はひづめのある動物。すでに生まれ変わって動物になっている、すなわち

長い時間が経つてもいまだ救済されていないことをいう。

三會得脱 弥勒菩薩がこの世に下生して衆生済度のために三回法会を行い、それによって人々が悟りを開くこと。

輪回 輪廻。

苦輪 生死輪廻の苦しみから逃れられないこと。

依怙 頼ること。頼りにするもの。

船師 仏の異称。苦海を乗りこえて彼岸の浄土に導く船の船頭にたとえた語。また、浄土の教え、阿弥陀仏の本願の念仏。

覺母 三世覺母。知恵を生む母の意で、文殊菩薩の異称。

願王 仏菩薩の願の根本をなす願。密教では、普賢菩薩のことを指す。

補処の弥勒 「補処」は一生補処の略。菩薩の最高位で、次の生涯には仏になることができる位。弥勒菩薩は釈迦の次に出世し、仏となるため補処の弥勒と呼ばれる。

大悲の観音 「大悲」は仏菩薩が衆生を救う大きな慈悲。観音菩薩は慈悲をつかさどり、衆生を救済する菩薩であるため、特に大悲観音と呼ばれる。

機感 衆生の機（縁によって悟りを開くことができる可能性）に仏が感応すること。

小機 小乗の教えを信ずる素質。また、その人。

機縁 正しい教えを求める資質が、教えを説くための縁になること。また、深い縁で結ばれていること。

宣風坊 平安京の条坊制における、左京の四条から五条の間。

紺殿 寺院の建物。

粟田関白道兼公 藤原道兼（九六一～九九五）。花山天皇を退位・出家させた。長徳元年関白となるが、同年死去。

智証大師 円珍（八一四～八九一）。天台寺門派の祖。

止観伝灯の誉 「止観」は天台宗の異称。「伝灯」は宗派の伝統を師から弟子へ伝えること。

慈堂 母の尊称。

懸磬 貧しくて何も所有していないこと。『比丘尼伝』第六に、「時

莊嚴寺曇斌法師弟子僧宗玄趣 共直仏殿懺懺致致 乃失菩薩璽珞及七宝澡罐斌衣鉢之外室如懸磬 無以爲備」とある。

洪恩 大恩。

禪林 俗塵を離れて静かに仏道修行が行われている寺。古くは寺の称。

ト「ト」には、うらないの意のほか、選ぶ・選定するの意もある。

定水 定心（心を一つの対象に統一して乱さないこと）を、静かな水にたとえた語。

釈尊の八万蔵の遺教 八万法蔵。「八万」は非常に多くの数の意。

仏の説いた教法全体のこと。

魯聖十八章の微言 「魯聖」は孔子のこと。「十八章」は、曾子が孔子に孝について尋ね、それを記述した『孝経』（全十八章）を指すか。「微言」は奥深いことばの意。

至孝は百行之先、報恩は万善之本 父母によく仕えること。『白虎通』攷黜に、「孝、道之美、百行之本也」とあり、『梵網経古述記』に、「孝為百行之本 先王要道 戒為萬善之基 諸佛本原 善從此生 孝名為戒」とある。

西楡影傾夕 西日で木の影が傾くように、日没まで時間がないこと。水菽 貧しいこと。また、粗食のたとえ。

堅牢地神 大地をつかさどる神。

唱導 仏教の教理を説いて信仰に導くこと

緇素 僧と俗人。

富樓那 釈迦の十大弟子の一人。弁舌にすぐれ、説法第一と称された。

定朝 ？～一〇五七。平安中期の仏師。日本彫刻史上屈指の名工とされた。法成寺造仏の功により、仏師としてはじめて僧綱位の法橋に叙せられ、法眼に進んだ。作例として、平等院鳳凰堂の本尊阿彌陀如来坐像が現存する。

綱位 僧綱の位。僧正、僧都、律師。後に法印、法眼、法橋の位も

これに加えられた。

蓮眼 仏の眼。

棘心 子どもが親を慕うこと。

親率の内院 「親率」は兜率天のことで、六欲天の第四天。欲楽に満たされているという。内院と外院があり、内院は将来仏となる菩薩の最後身の住処とされ、弥勒菩薩が常に説法をしている。

一瞻一礼の利益 「一瞻一礼」はかすずき、敬い慕うこと、深い気持ちを含めたあいさつ。『地藏菩薩本願経』には、「作此菩薩一瞻一禮者 是人百返生於三十三天」

「或聞地藏菩薩名 一瞻一禮 是諸天人轉增天福」として、地藏菩薩の利益が説かれる。

日吉十禪寺 十禪師。日吉山王七社権現の一。地藏菩薩の垂迹。

内証外用 内に悟り、外にその悟りのはたらきを現すこと。

御衣木 神仏の像を造るための材木。

資貯 財産。たくわえ。

天衆地類 天地の神々やその眷属。

大権薩埵 仏・菩薩が世の人を救うために仮に現れた姿をいう。

恒沙劫 非常に長い時間。『塵添蓋囊鈔』に、「念仏の功德は、恒沙劫の間にも不可説尽云へり」とある。

簷花 軒先の花のこと。

仏餉灯油 「仏餉」は仏に供える米飯。「灯油」は燈明用の油。いず

れも仏前に供えるもの。

緑羅之服、紅霞之澹 「緑羅」は緑色のうすもの。「紅霞」はくれない色のかすみ、夕焼けなどでくれない色に染まつた雲。「澹」は飲食物。薄い衣服を着用し、霞を食べるように質素な生活をする事をいうか。

資儲 財産。蓄え。

夏臈 僧の出家後、安居の回数によつて数える年数。

金輪聖王 古代インドにおける理想的な王の概念である転輪王のうち、最上の王。ここでは天皇家のために祈っている。「御質抄」に、「右奉為金輪聖王玉体安穩增長宝寿。兼為年穀成就天下太平。」とある。

(版本・上巻第一話「壬生寺草創并本尊出現の事」)

本話は、『地蔵菩薩靈驗記』第十四巻第一話に同話がある。

一 当寺御堂供養事 寛弘二年

【本文】

于時快賢僧都は一条院御宇*正暦二年に一刀三礼の願成就して、一千日のすぐる事たとへば大陽東にいで、赤日西にいるよりもなをはやし。然則、*寛弘二年に至て御堂の供養あり〔寺号小三井寺〕。御導師は*本願僧都なり。御門弟の*上綱*供奉*琳巖〔異名六郎禪

師〕、権少僧都*覚増、中将阿闍梨*性尊、三位法眼*基尊、宰相禪師*定尊、これ等をはじめとして*職衆*数輩なり。大法会の儀式、*大行道次第、舞楽音声の仏事、誠以巖重の霊場、上界の天衆も影向し、十方の諸仏も*証明したまふとぞおほえける。称揚讚歎の諸衆ならびに見聞随喜の諸人等、大僧都をもて生身の地蔵尊とあがめ奉らぬはなかりけり。夫地蔵の本地

〈錯簡〉

されば參詣の道俗、結縁の男女、信心をいたすは*現当の*悉地満足せずといふ事なし。*延命地蔵経には、*二世ノ所_レ求_レ 悉_ク不_レ成者 不_レ取_二正覚_一と説り。*現文これあらたなる者なり。

〈絵〉

【語注】

正暦二年 九九一。

寛弘二年 一〇〇五。

本願僧都 快賢のこと。

上綱 僧綱中の上位で、僧都以上。

供奉 「内供奉」の略。宮中の内道場に奉仕する僧。転じて、高德の僧をいうこともある。

琳巖 不詳。

覺増 不詳。同時代の資料としては、高野山真言宗善住寺を長保元年に再建したこと、高野山真言宗山路寺を永承二年に創建したことが伝わるが、別人であろう。

性尊 不詳。

基尊 不詳。

定尊 不詳。

職衆 法会するとき、梵唄・散華などの職務をつとめる僧衆。

數輩 三〜五人、あるいはかなりの人数。

大行道 大勢の僧尼が行列して経を読みながら仏像や仏殿の周囲を巡り歩くこと。また、その盛大な儀式。

証明 ある事柄について判断や理由などが仏の真実などになうことを証拠だてること。

現当 現世と来世。

悉地 密教で、修法により得られた悟りの境地。

延命地藏經 『延命地藏菩薩經』。

二世ノ所_レ求_ル 悉_ク不_レ成_者 不_レ取_三正_覺 『延命地藏菩薩經』に、

「二世所求 悉不成者 不取正覺」とある。

現文 いま現在、見ることでできる文章。実際の証拠となる文章。

(版本・上巻第二話「御堂供養の事」)

注

① 泉万里「壬生地蔵縁起絵巻とその周辺」(『仏教芸術』二六八、二〇〇三年五月)

② 元禄・寛政の版本が追加しているのは、主に現世利益的靈驗譚である。柴田芳成氏は、「絵巻から元禄本、元禄本から寛政本へと、縁起の内容が増補されるに際して、先行する地藏説話集が資料として用いられていたこと」を明らかにし、それらは「ほとんどの場合、病氣平癒や危難救出といった、近世の地藏信仰の一面を強く表している、きわめて現世利益的な靈驗のありさま」であるという(『版本「壬生寺縁起」における説話取集」(『文芸論叢』七八、二〇一二年三月)。

③ 佐藤瑛子「壬生寺縁起について」(『元興寺仏教民俗資料研究所編』壬生寺民俗資料緊急調査報告書 第三分冊)一九七五年)

④ 伊藤正義「壬生寺縁起」(『大阪市立大学国語国文学会会報』二三、一九七八年一月)

⑤ 若杉準治「壬生地蔵縁起絵巻」(『絵巻物総覧』角川書店、一九九七年)

⑥ 泉前掲論文。

⑦ 伊藤氏前掲論文。

⑧ 泉氏前掲論文。

⑨ 「の」の字母は「濃」で、現存絵巻と一致する。

⑩ 『言経卿記』慶長元年(二五九六)三月二十八日条には、「大和三位入道へ罷向脉ヲトラセ了、(中略)天王地藏縁起六之内一卷説之」とある。同慶長元年七月二十一日条には、「大和三位入道へ罷向、ホシイ、有之、壬生地蔵堂縁起二巻説之」とある。言経は大和三位入道宗恕と親しかったようで、しばしば訪れている。宗恕は壬生寺の寺奉行であった(同慶長二年三月二日条)。右の記述も、宗恕の元を訪れた時点で、「地藏」は

〈資料紹介〉「壬生地蔵縁起絵巻」注釈（一）

壬生の地藏尊以外であるとは考えにくく、伊藤正義氏が指摘する（前掲論文）ように、三月二十八日に縁起の第一巻を読み、七月二十一日に第二巻を読んだと考えるのが自然であろう。すなわち、「天王地藏縁起」は「壬生地蔵縁起」の誤写であると考えられる。また、これによって、慶長元年三月二十八日時点で、壬生寺の縁起絵巻は六巻の卷子本形式であったことが明らかとなる。

〔付記〕 壬生寺貫主松浦俊海師、副住職松浦俊昭師には、格別のご配慮を賜りました。厚く御礼申し上げます。